

カンパーンペット県でのコミュニティ・ディバロプメント

井上英晴*

Community Development in Kamphaeng Phet

INOUE Hideharu*

キーワード：地域開発，経済開発，社会開発，共同社会開発，地域福祉

Key Words : regional development, economic development, social development, community development, community welfare

はじめに

岡村重夫は、「(*地域)『開発計画』は、経済開発、社会開発および共同社会開発という三本柱のうえにたつものでなければならない¹⁾」と言う。特定の地域の開発は、国や自治体、私企業や地域住民(組織)が関わって進められるが、ディバロプメント(development)とひとことで表されるものが、開発(外在的なもの)と受け止められたり、発展(内在的なもの)と受け止められたりする。地域開発は多少なりとも《巨大》プロジェクト(project)なので、プランニング(planning)ということが機軸となるが、それは、(1)異分野専門性を糾合して総合的に進められる、(2)地域課題〔個別課題〕の優先順位がつけられる、(3)先行きの見通しがもたせられる、(4)無(潜在的なもの)から有への資源創出がはかられる、(5)政策が計画という形で住民に提示され、評価される、(6)ゆきあたりばったりではなく、計画的段階的に開発が進められる、(7)計画(企画、実行、そして評価の各段階で)に住民参加が図られる、(8)予算の裏付けが得られる、ためでもある。

経済開発は、産業経済面での開発が物質的生産力の拡大をもたらす、住民の所得の増大が図られるが、他方で環境破壊や公害、伝統・文化等の破壊による共同体(community)の衰退、あるいは地場産業の衰退をもたらす、社会生活の不均衡を引き起こしたりもする。社会開発はこうした経済開発の弊害を抑えつつこれを補完するものとして、産業や生活の基盤となる公共施設、道路・港湾・河川・鉄道・通信情報施設・上下水道・学校・病院・公園・公営住宅など社会資本(social overhead capital)ないしはインフラ(infrastructure)の整備が、経済開発と並行的に図られる。これら社会開発も住民生活に大きな影響をもたらすものともなる。そして、社会開発で明らかになった住民参加の重要性が、《共同社会》開発を呼び起こす。これは地域の内から、地域のために、地域による内発的開発をめざし、《共同》開発、《人間》開発を図るものとも言える。

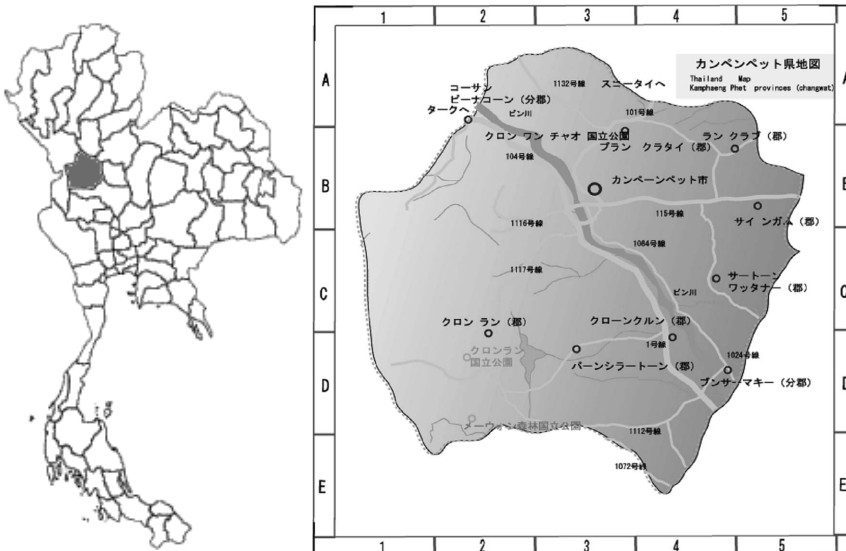
*鳥取大学地域学部地域政策学科

地域開発には、これら三つの開発が欠かせないものではあるが、これらの評価には、ソーシャル・キャピタル (social capital) の概念が有効であろう。これは他者 (異質な人々) との信頼関係 (絆) を築き、相互に価値や規範を生み出す創発的なネットワークであり、社会において最も大切なものは何かということが問われるものでもある。地域開発を歴史的に振り返り、ソーシャル・キャピタルが何であったのかと問えば、経済開発による私的財 社会開発による公共財 共同社会開発による共同財と言えようか。共同財とは、神野直彦によれば、文化 = 生活様式であるが、現代における共同財の再生を《代理人文化》(産業社会の市場文化)からの解放と位置づけている²⁾。《コモンズ》などにも通ずるものがある。神野はまた、「develop とは『包む』という envelop の反対語であり、『ほどく』ことを意味する。したがって内在しているものを解き放つことを発展という。『木が机に発展した』とはいわないように、外からの圧力で変形することを発展とはいわない。つまり、発展とは『内発的發展』しかありえないのである³⁾」と言う。共同財の再生とは、地域社会の内発的發展としてのコミュニティ (community) の再生をさすものでもないか。地域福祉とは、地域社会を基盤とした住民自治にもとづく社会福祉の創造とも言えるが、コミュニティワーク (community work) は何よりもこのコミュニティの再生を図るものとして位置づけられよう。地域社会、農村社会、都市社会、そして開発途上国の地域開発も、コミュニティをいかに再生 (懐かしいものをより高次の形態において再生)・持続させるかが肝要であるということになる。

カンペンペット県でのコミュニティ・ディバロプメント

1. カンペンペット県の久間恵里子

2006年2月18日から2月22日にわたって、コミュニティワーク研究会のメンバー2人と、タイのカンペンペット県に福祉等の視察旅行に出かける機会を得た。それは、久間恵里子さん(25)と



図：カムペンペット県。左はタイ全土の中の位置づけ、右は拡大図

という一人の《コミュニティワーカー》のタイ現地活動を通して、岡村重夫のいうコミュニティ・ディバロブメント（Community Development, 岡村はこれを共同社会開発と訳している）の現状と課題を探るものであった。

タイ（Kingdom of Thailand）の概要をみてみると、タイの国土は51万4千平方キロ（日本の約1.4倍）。大多数がタイ族。その他、華僑、マレー族、山岳少数民族等。宗教は、仏教 95%、イスラム教 4%で、国王をいただく立憲君主制の国である。タイの総人口は、6,401万人で、このうち労働力人口は3,491万人、労働できない15歳未満人口が1,569万人、家事従事者、学生、就労不能など15歳以上の非労働力人口が1,341万人である。農林漁業従事者が41.0%と最も多いのが特徴で、次いで製造業が15.7%、サービス業16.4%、商業金融業17.9%などとなっている（以上国家統計局の労働力調査 2003年）。

カムペンペット県（カンペンペット県）は、チャオプラヤ川の、4大支流のひとつ、ピン川が流れ、西側が、山地で、森林に覆われ、東側が、平地になっている。その、県都、カンペンペット市は、ピン川の東に位置し、以前は「チャカンラオ」と「ナコンチュム」と呼ばれていました。城塞で囲まれた都市として、発展した。タイの北部では、南に位置していて、バンコックからは、330km離れている。車で、5時間くらいの距離にある。特に、バナナの収穫が多く、毎年、バナナ・フェスティバル（収穫祭）が行われている。14世紀に、カンペンペットは、スコタイ王国の直轄地にあり、同時に、軍事的な要塞でもあった。その後、アユタヤ王朝の時代にも、その、城塞都市の、機能は、維持された。現在でも、その城壁や、遺跡が残り、ユネスコの世界遺産に登録されており、カムペンペット歴史公園として、公開されている。カンペンペットには、9つ郡 Amploes 1、2つの分郡King Amploes、があり、その下に78の町（タムボン）、823の村（ムーバーン）がある⁴⁾。

このセンターのあるカンペンペット県（Kamphaeng Phetバンコク（Bangkok）から約300キロ北の方にある。カンペン壁・城壁、ペットはダイヤモンド、「ダイヤモンドの壁」の意味。）は、「農業県。この地方で採れるタピオカを目当てに日本の味の素が大きな工場を作った」とインターネットを引くとかかっている。人口約76万人、センター管轄の山岳民族約9千人。その内訳は、リス族、ラフ族、カレン族、モン族、ヤオ族、ルワ族の6つの部族であるが、1つの村に1部族というわけではなく、複数混住しつつ、5つの郡にまたがる28の村に住んでいる。

久間さんは、関西学院大学の高田眞治先生の薫陶を受けた人で、3年生の時に一年間休学してカンボジアにわたり、卒業後、今度はジャイカ JICA（Japan International Cooperation Agency独立行政法人国際協力機構）の重要な事業の一つである JOCV（Japan Overseas Cooperation Volunteers 青年海外協力隊）に応募され、2005年の1月から3月の間、タイ語を中心とした2ヶ月半の訓練を受けた後、2005年4月から2007年4月までの2年契約で、タイの“社会開発と人間の安全保障省”（MINISTRY OF SOCIAL DEVELOPMENT AND HUMAN SECURITY）管轄下の“山岳民族福祉開発センター”（久間さんは DEPARTMENT OF SOCIAL DEVELOPMENT AND WELFAREをそう呼び慣わしていた）に配属されていた。ここでの久間さんの身分はボランティアで、所長や部長クラスは国家公務員、それに現場採用の民間人スタッフがいた。久間さんにはセンターから住居費が、JICA から生活費が支給されている。

2月20日、私たちはこのセンターに伺い、久間さんの直属の上司ガラケイ（CHAKKIT GARAKATE）氏に、久間さんのcounter partnerであるフォン（FON）さん（32）を交えて懇談した。

ガラケイ氏や久間さん(通訳及び補完)によると、このセンターができたのは、今から40年ほど前であるが、苦労しているのは、一つには、山岳民族には、出生届がない、はっきりしないということで、タイ国籍が取れない、IDカードが取得できないことである。つまりは、難民扱いで、よその県に行くにも、学校や大学に行くにもIDカードの提示が求められる。そこでセンターは、国籍・IDカード取得の支援をしているが、タイ人には一般的にこれら少数民族を見下すところがあり、なかなかIDカードを発行してもらえないとのことである。二つには、職業上の問題で、これら山岳民族の人々に職を与えたいが、彼らがいるところは土地がやせているところもあるし、農業をやっているも収入は低いし、生活を何とか向上させてあげたいとのことである。彼らは、作物を売ったり、何かの小売りを営んだり、タピオカやキャスタバという水をやらなくても育つ作物を作って味の素の現地工場に持って行ったり(「味の素」に入れるということで批判がある)、あるいは1日あたり120パーツ(日本円で約360円ほど)で土地をもつ人に雇われるなどしている。三つには、薬(ヤクつまりアヘン)の問題で、山の上では、農業よりもアヘン栽培の方が実入りが良いということがある。若者の麻薬問題もある。山岳民族の村に行くと、父親のない家庭にぶつかるが、アヘンで捕まると7年ほどは出て来れないからである。

質疑応答に移り、福祉サービスの種類や内容について質問すると、久間さんが次のように答えた。

- (1) 児童や学生への支援：貧しい家庭に奨学金を県から1年に3,000パーツ(日本円にして約6,000円)貸与される。お金は国からの金である。
- (2) 障害児を持った母親への支援：省庁の手引き書にもとづき障害児への接し方などをアドバイス。
- (3) 女性への支援：離婚等で一人で子育てしている母親に、1年に6,000パーツ弱を支給。
- (4) 高齢者への支援：家族がなく、世話をする人がいない高齢者を、高齢者施設に送る。ただし、カンペンペット県にはこの手の施設がなく、近くの県や、チェンマイ、コラート、バンコクなどの施設に送る。施設内ではいろいろの活動があり、お寺参りなどにも行く。その他金銭給付等もあるが、センターにまで来れない高齢者宅には、スタッフが村を訪問して届ける。
- (5) 障害児者への支援：脳性麻痺、目や耳の不自由な人の施設など、タイには施設は少なくはない。入所施設に入ると帰れないので、一生出られない。通所施設は、親や介助者が一緒に行かないと利用できないで、お金持ちが利用することになる。

センターでは、カンペンペット県の山岳民族(よその県にも居住)がいる28の村を三つに分けてエリア1、エリア2、エリア3とし、一つのエリアごとに2人のスタッフが担当するエリア制をとっている。月末にエリアスタッフの定例会が開かれ、久間さんはこのエリアスタッフの中に入っているわけではないが、定例会には参加する。久間さんは、ガラケイ氏を「部長」と呼んでいたが、総務担当、女性グループ支援担当、障害・福祉担当などと部が分かれていて、ガラケイさんは(したがって久間さんも)女性グループ支援担当である。

久間さんは2005年4月から5月までは、バンコクでホームステイや、大学で語学を学んだりして、タイに慣れる訓練をし、以降8月までは、フォンさんのバイクの後ろに乗ってエリア1とか2とかのいろいろなところへ連れて行ってもらった(エリア3は辺鄙なところにあり、車でないと無理)。今でも仕事は基本的にフォンさんと2人1組です。

2. タイで久間恵里子さんがかかわった共同社会開発 (Community Development)

(1) 山岳民族との商品開発と市場開拓

久間恵里子さんの略歴を改めて確認すると、青年海外協力隊平成16年度第3次隊(19カ国,16名)職種：村落開発普及員 タイ, 活動内容：社会開発省ラタプン開拓地にて、地域住民の農業外収入源の確保のための業務に携わる。職歴等：関西学院大学社会学部卒。2002年度卒業論文は「福祉教育とボランティア活動 「共に生きる社会」を目指して」。大阪府社会福祉協議会ボランティア。市民活動センターで嘱託職員として勤務とある。この 農業外収入源の確保のための業務 が経済開発ということであろう。久間さんはこのため商品開発や市場開拓を支援している。以下、それらを具体的に各部族について見てみよう。

リス族は中国中央部よりタイに移住してきた。現在はタイと中国南部で生活している。民族衣装の特徴はとても色鮮やかな衣装であることで、刺繍はせず、織物を使っての商品がこの部族の得意商品である。リス族の民族衣装の一部を使ってのキーホルダーは人気 NO1 商品で100円。リス族の織物をあしらった財布は内部にはチャックもついていて400円。(山岳民族福祉開発センター商品。以下同様)

ラフ族はチベットからの漂流部族で、現在タイ、ラオス、ミャンマー、中国南部で生活している。民族衣装の特徴は黒を主体にしていて、商品にも取り入れられているギザギザデザインはこの衣装からきている。伝統的なラフ族の踊りに使われる楽器は全て手作りである。ラフ族のデザインをあしらったカバンは350円。ランチョンマットは270円。

カレン族はミャンマーよりタイに移住してきて、現在はタイとミャンマーで生活している。タイの山岳民族の中で最も大きな部族である。未婚の女性は白い民族衣装を身にまとい、結婚後はピンクや赤の衣装を身にまとう。民族衣装は上下とも全て手織りである。カレン族は刺繍を好まず、織物が最も上手な部族である。カレン族の民族衣装は綿100%で着心地も良く600円から。ショールとショルダーバックはどちらもカレン族の織物で300円から。

モン族は中国南部よりタイに移住してきた、タイの山岳民族の中で2番目に大きな部族である。モン族の女性の民族衣装に使われている藍染も全て手作業で、始めにろうで下地を書いていき、刺繍も色鮮やかな糸を用い、一つの商品に仕上げていく。モン族の民族衣装に使われている刺繍をあしらった財布は、内部にはチャックもついていて400円

ヤオ族は中国南部よりタイに移住してきて、現在、タイ、ラオス、ミャンマー、ベトナム、中国南部で生活している。中国の習慣を多様に受けている部族であり、年配の人の中には中国語を話す村人もいる。襟元に赤いファーをつけたヤオ族女性の民族衣装はインパクトがあり、頭の髪の毛をまとめあげている黒い布を巻く技術はとても高度で大変時間がかかる。ヤオ族の女性は刺繍が最も上手な部族で、いつも近所の村人同士が集まり、輪を作って世間話をしながら刺繍をしている。ヤオ族の刺繍をあしらったカバンはA4サイズで550円。壁飾り(タペストリー)は40cm×100cm1000円。

「カンペンベット県山岳民族福祉開発センターが支援している村の女性グループの商品を簡単にまとめたものがこの資料です。部族によって同じ商品でも素材の違い、作成段階の手間の違い等で値段が異なります。どの部族の商品に対しても言えることはデザインのリクエスト、色のリクエストも受け付けています。全てオーダーを受けてから手作りで作成するので、リクエスト通りの商品をお届けすることができます。(例：小銭ポーチの柄でペンケースや名刺ケースを作ることもでき

ます)カレン族の民族衣装をオーダーの際は、サイズや好みの色合い等もご相談にのります。価格に関しましても交渉させていただきます。

青年海外協力隊 カンペンベット県山岳民族福祉開発センター勤務 久間 恵里子⁵⁾

(2) リス族との関わり

2月20日、リス族のお宅に訪問し、久間さんが改良を加えたキーホルダーを、家に一人いた初老女性のアミマさんから購入。ついている小さなサクランボのような3個ほどの飾りは、リス族の民族衣装の帽子の飾りから取り入れてつくられたものである。見栄えがしない袋で売られていたのを、久間さんがしっかりした袋にし直して、説明もタイ語で書かれていたのを、日本語に訳したものを裏につけた。このように、久間さんは、リス族の人たちと話し合いながら、日常生活の中で使われるもの等から、商品化できそうなものを考え、バンコクのこの手の販売店が要求するものに合わせながら、改良を加え、また販路も開拓していったそうである。タイの伝統からヒントを得て、民芸・手芸品として商品化し、部族の人々が現金収入を獲得できるようにしていったのである。

(3) ヤオ族のスウィチ村との関わり

2月20日、23世帯からなるヤオ族のスウィチ村の、かなり大きな吹き抜けの(つまり建物の壁等があまりふさがれていない)作業所のようなところを訪れた。10人ほどの女性が、中には子供連れで、6台ほど並んだジューキミン(これらはセンターのものが貸し出されている)に向かったり、壁際の椅子に腰掛けて、刺繍をしている人もいる。ヤオ族の女性は幼い頃から刺繍に親しみ、だれでも刺繍ができるとのこと。「この村で刺繍ができない女の人はどんな扱いなのだろう」と説明を聞くメンバーから心配の声もあがるほどである。それらの技術は山岳民族の衣装づくりに、いわば身内的に生かされるわけだが、これらの技術を改良して刺繍の商品化ができぬか、6年ほど前からセンターで考えられ、最近チェンマイからタイ人のインストラクターを1日500バーツで招き、ヤオ族の女性を対象に1ヶ月ほどミシンの研修が行われた。見ると、ミシンを器用に扱って、何か袋のようなものをつくっている女性がいる。この袋はその研修会の課題なのだそうで、完成させようとしているところである。おおむね40歳くらいの女性が多い。久間さんは、これらやる気のあるヤオ族の女性15人くらいを、市場開拓をもちかけつつ組織化した。ヤオ族の女性らのグループへの参加は、「現金が欲しい」(生活水準を上げたい)という内発的動機に支えられている。それまでは、米と野菜の物々交換が行われる程度であった。

タイの女性は働き者で、男は力仕事をするが、家の前で寝ているときも多い。女性は稼いでも、家の中では上下関係が厳しく、下で甘んじている。資本主義経済に境界はない。タイはバイクが多いが、これなども一度使い出すとやめられなくなる。どこへ行くにも結構な道のりだし、舗装も進んでいない。こうして稼いだお金は、市場で野菜や魚、肉類、その他食料品の購入、衣料(古着)の購入、病院代・薬代、中古自転車の購入、子供の学校の制服(小学校のは200バーツ、中学校のそれは300バーツ)や食費やおやつ購入などにあてられる。久間さんは 継続性ある市場 開拓が課題だという。いつも市場開拓に努力している。「私とその道の専門家なら、もっと売れる商品づくりができるだろうに」とも言った。壁周りの椅子に腰掛けたヤオ族の女性らは、おおむねメガネを掛けている。縦横に編まれた布地のその接点に針を刺して刺繍をしていく、実に細かい仕事であるが、ときどき談笑しながら、手は止めずに、素早く刺繍している。久間さんは売れる商品という観点から、刺繍の色彩やデザインにアドバイスをする。「独断と偏見から」と彼女は言う。強制はしない。グループの女性はそれを素直に聞いてくれるのだそうである。商品づくりは、夜電気を

つけてやると電気代がもったいないからと、夜はやりたがらない。売れると、刺繍した人はこれだけ、縫った人はこれだけ、グループにはこれだけなどと、配分がなされる。

(4) ヤオ族の障害児との関わり

2月20日、水頭症の女の子エミ（9歳）のいるヤオ族のお宅を訪問した。薄暗い土間のござの上に枕をして寝ていた。久間さんのエミとの出会いは、村の人から「あそこに頭の大きな女の子がいるよ」と教えられたことからである。タイの人の説明は率直で分かりやすい。扇風機が3台あって、その内2台がまわっていて、1台は首を振っている。上半身は水色のTシャツで、下半身はおむつ。手は握りしめられていて開かない。この子は日本人なのである。父親は日本の有名企業の勤め人、母親はヤオ族の人。正式に結婚している（タイには、「ちょっとおかしな日本人」もいて、5人くらい奥さんをもっている人もいるのだそうである）。この子は長女で、他に2人の息子がおり、その男の子らとカンペンペットの隣の県で夫婦は働き生活している。したがってこの家でエミの世話をしているのは、母親のお母さん（つまりおばあちゃん）ともう一人、母親の妹（つまりおばさん）の2人である。エミは日本で生まれ、日本国籍をもっている。施設に入れられるということで、おばあちゃんが「施設に入れるくらいなら引き取る」と言って、エミが9ヶ月のときからここで一緒に生活している。父親は仕事、母親は家のことや2人の子育てで精一杯なのだそうである。2人はときどきはこの家に来る。むろん養育費は出している。IDカードをもたないので、エミはタイの手だてが受けられない。障害者手帳を取れば、1ヶ月500バーツがおりるようであるが、日本人であることの方がメリットが大だということなのだろうか。おばあちゃんは、「自分の孫だから自分が面倒見なければ」とがんばっているらしいが、「かわいそう」「かわいそう」ばかりで育てているとのこと。おばさんも「結婚しないでこの子の面倒を見る」と決意しているらしい。そのうち水浴びの時間になり、久間さんと女性のメンバーがついて行った。

私がこうしたエミを取り巻く状況をどうしたものかと考えていると、メンバーのひとりが傍らに来て、「どうしたものか、どう考えたよいか」と問いかけてくる。同じことを考えていたらしい。私は岡村重夫の社会関係の障害の是正ということを念頭に置きながら、「一個の市民としてのエミさんの立場に立ってその生活条件の改善に取り組む。エミさんへの更なる働きかけ（多様な刺激）が欲しい。今の寝かせきりから座り、座りから立って歩くという方向での働きかけが必要。それはおばあちゃんやおばさんだけでなく、村などの子供たちや、ケアやリハビリの専門家の働きかけが得られるとよい。エミさんと家族関係の改善では、やはりエミさんへの父母の働きかけが欲しい。2人ともここにいないという状態はなんとかならないか。極端なことを言えば、エミさんと2人の息子の子育てを、取り替えるということも或いは考えられないか。エミさんと近隣関係の改善では、こうしたおばあちゃんとおばさんがかりきりの介護の、村人との相互扶助は形成できないか。2人の話し相手でもよい、2人が気分転換できたり、自分のことをできる時間を少しでも周りの人の援助でできないか。あるいは村の子供たちを遊びに来させるようにはできないか。エミさんと保健・医療関係の改善では、エミさんの手術後のアフターケアはどうなっているのか。リハビリテーションはどうなっているのか。保健・医療関係者との連携強化が望まれる。エミと教育関係の改善では、このまま教育を受けられない状態をそのままにしておいてはいけぬ。訪問教育やあるいは《養護学校》への入学はできないのか。エミさんと社会福祉関係の改善では、エミ担当のソーシャルワーカーが欲しい。同じ障害児仲間の会づくり（或いはネットワークづくり）や、支援者団体づくりはできないか。デイケアセンターがほしい。エミさんに適した車いすが欲しい。事態改善へ向けた、

行政へのソーシャルアクションが組織化できないか。エミさんはこちらの国で住民として生きるなら、国籍の取得も必要である。」と、タイの内情がほとんど分からないままこのように答えた。エミはパワーレスな状態にあると思われるが、パワーに欠けるわけではない。内に秘められている。そうした潜在力を引き出す、つまり《開発》する《人間開発》、《社会環境開発》が必要であると思われた。

女性メンバーの話では、水浴びのバスが小さすぎる。おばあちゃんが水浴びさせているとき、この何も話さない(話せない)エミも実に気持ちよさそうにしていたとのことである。戻ってきて、おばあちゃんは抱き上げて、エミに水を飲ませている。エミの口端から何か白いものがだらだらこぼれる。終わって、エミの頭からおばあちゃんが手を離すとカクと首が前倒しになるのを、おばあちゃんは受け止める。それを3回ほど繰り返している。こんなことをして大丈夫なのだろうかと思う。何か要望はないのかおばあちゃんに聞くと、「別にないが、首の落ち着くイス(車いす)がほしい。そうすれば、家の前を出して日光浴などもさせてあげられるのに」という。久間さんによれば車いすはある。見に行くと、使われてなさそうな、水平近くに倒せられるが、首の固定ができない車いすがあった。久間さんもそのような車いすを心がけてはいる。久間さんが、タイでは村社会が日本より強いので、「健常児が障害児と一緒に遊んでくれる。障害児を肩に担いで、川に水遊び(水浴び)に行く光景も見られる」と話していた。

(5) モン族の障害児との関わり

2月20日、モン族のお宅を訪問した。家にくっついて、前面には扉や壁のない出っ張りのような部分があり、土間にござを敷いて小年が腹這いになっている。この家の長男のガウさんである。納屋(仮にこう呼んでおく)には、ひもが横渡しに張られて、加工食品がぶらさげである。ここは売店でもある。ガウさんはここで店番をしているのである。納屋のそばに車いすが置いてある。しばらく話していると、ガウさんがもぞもぞ体を動かして身を起こし、座る格好になった。久間さんの話では、ガウさんは座ることができなかったのであるが、リハビリセンターを手配し、そこで泊まりがけで訓練して、座ることができるようになったのだそうである。だから車いすがあるのであった。納屋から庭へかけて「フラットにして電動車いすを提供したい」と久間さんは言う。ガウさんに聞く。「売れますか」「売れます」、「爪が伸びているようですが」(足の爪が長い)「近いうちに切ります」という調子である。兄弟が多く、7人もいるが、兄弟仲はよいとのこと。座ったガウさんが茶筒を少し大きくしたような筒を取り上げ、曲がりきりの手首の不自由な手で開けようとしている。案の定、中からは売り上げのお金が出てきた。かなりの額のように見受けられる。「たくさん稼がれましたね」。ガウさんがにっこりする。家族の人たちも出てきて輪に入っていたが、学校から帰ってきた妹のような女の子は、カバンを置き、制服を脱ぐとばたばたと表へ駆けていき、姿が見えなくなった。

(6) 障害者青年との関わり

2月21日、バンコク郊外の村に向かった。バナナの木やその他見たこともない木々がびっしりと生い茂り、ジャングルかと思われるその間を濁った沼のような川が寄り添っている、舗装されていない細い道をワゴン車は行き、ようやく畑の見えるところに出る。見ると川の上に木造の家が建っている。中に39歳の男性が床に横になって私たちを迎えた。23歳で下半身麻痺の身体障害者の方である。家族がグラスを持ち出してきて見せてくれる。みると、グラスの上から半分返くらいま

でピンクの蓮の花の模様が張られている。これが彼のつくる商品なのである。グラスや模様はいろいろある。タイ政府の職がない学生を障害者や高齢者のもとに派遣する事業で学生ボランティアがここにも来て、この青年は何かできるのではないかとアドバイスしたのがきっかけとなったそうである。塗料や材料はドイツから輸入しているとのこと。父親は公務員、母親は農業をやっている6人家族である。こうした製品づくりは、1999年頃から始めたとのことで、一個つくるのに2日はかかり、1ヶ月の収入は250～350バーツである。他に障害者年金を月500バーツを貰っている。「近隣とのつきあいはどんな具合ですか」「近所の人たちがときどき来ます」、「移動のときはどうされていますか」「車いすに乗って、家を出て、車に乗り換え、車いすは車に積んで出かけます」、「現在の生活はいかがですか」「今の生活に満足している、まちに出での自立生活は望んでいない」、「食事や排泄はどうしてますか」「母が手伝ってくれます。おむつもしています」、「公的な福祉サービスは受けていますか」「受けていません」、「水浴びはどうしてますか」「この寝床（布団の下も含め、この部屋はかなり広い板の間）から板の間にずって、上から水を掛けて貰います。水は板の間から下の川に抜けます」、「こうした製品づくりをして、家族の間での地位に変化はありましたか」「する前は自分に価値はなかった。今は役立っていると実感がある」、「何かこれ以外に楽しみはありますか」「これで目一杯」、といったやりとりがなされた。

3. まとめ

久間さんの話では、配属される前の訓練では、(1)どのように村の人と《開発》にとりくむか、(2)《村の人と共に》(村の人となりきって)という視点をもつこと、この2点が特に教え込まれたという。村の開発ということでは、前任者を引き継ぎつつ、新たな商品市場を開拓し、部族の文化伝統を保持しつつ、現金収入の増加を図り、生活水準の向上を目指した。障害児者の発見と関わりについては、(1)村には障害児が多かった。(2)福祉隊員に前任者の仕事の引き継ぎを期待された。(3)自分もやりたかった。自分の仕事のアイデンティティということも考えたし、職場から言われた女性グループの組織化、商品開発、市場開拓だけでは終わらせたくなかった。(4)障害児のいる家庭の人たちの無知ゆえにか、ちょっとのアドバイスがよく聞いてもらえた。親は概して障害児とどう接してよいか分からず、「かわいそう」「かわいそう」ばかり。山岳民族福祉開発センターの職場のスタッフもこの手の“無知”の支援ということをあまりしたがらない。彼らは「生まれてこなければよかった」とか「自分の子ではない、他人の子だ」とか言う。「これが福祉を名乗る職場の人の言うことか！」と久間さんは怒りを覚えたという。

おわりに

タイの地域村落は、「地域共同体」モデルに該当しそうであるが、そこから「コミュニティ」モデルへは、「地域主体的態度」を身につけることや「普遍的な人権意識」への気づきが必要である。その実現を目指すのが地域組織化(コミュニティ・オーガニゼーション)活動であり、コミュニティ型の地域社会の実現をめざす一般的地域組織化活動と、一般的コミュニティは、多数の地域住民に共通な関心や問題意識に従って成立するものであるから、地域における少数者の問題や要求は、一般的なコミュニティを形成する契機とはなりにくいので、日常生活上の困難を現に持ち、または持つおそれのある個人や家族、さらにはこれらのひとびとの利益に同調し、代弁する個人や機関・団体が、共通の福祉関心を中心とする「福祉コミュニティ」形成をめざす福祉組織化よりなる。

久間さんの活動はエミさんや、ガウさんなど、それぞれを中心とした福祉コミュニティを形成し、地域社会を「当事者を地域社会にとどめて保護をあたえ、地域社会の住民として彼の地域社会関係を維持させながら、福祉サービスを利用させ、そして最後には地域社会に復帰させることをめざすならば、その地域社会は多かれ少なかれ、コミュニティとしての構造をもつ⁶⁾」ように支援していることにならないだろうか。

岡村はまた、一定の地域社会に単一のコミュニティ（ここでは例えば村）があるとは限らないとして、利害・関心の多様化に応じたコミュニティ集団の成立を説き「英国でいわれるコミュニティ開発事業（community development）は、必ずしも近隣社会だけを対象とするのではなく、各種の地域集団（ここでは部族集落やそのまた中の女性グループということにもなろう）が、同一性の感情にもとづく「コミュニティ集団」に発展するように援助する過程を意味する⁷⁾」と言うが、久間さんの活動にも当てはまる。例えば女性グループ（ヤオ族）は、自らの要求（needs）（生活水準の向上、現金収入の確保）を決定し、これを充足するための活動目標（部族の手芸の製品化）を明確にして、必要な集団活動に参加しており、またそれによって体験せられる「同一性の感情」（the feeling of identity）を共有することが「コミュニティづくり」となっている。こうした住民参加は、コミュニティの自治（community autonomy）と権限の分散を実現することによって、地域民主主義を目的とすると同時に、住民の「同一性の感情」にもとづく相互扶助、相互連帯意識を促進するような方向で進められなければならない（住民参加によって、コミュニティは社会的サービスの受益者であると同時に、提供にもなる⁸⁾）のであるが、久間さんは女性の地位向上にも関心を払っている。

岡村は住民参加についてはさらに、「『地域開発』と『住民の福祉』とを結びつけるものが、住民参加の原理にあることを、主張しているのは正当であるとしても、問題はなぜにそうなのであるか、ということである。民主主義の原則をもちだすだけでは不十分である。われわれはすでに前述したように、生活の主体者が住民自身であること、そして真に『福祉』の名にあたいするものは、この生活の主体者が、みずからの自発的努力によってつくりだすものであることに、注目したいと思う。外面的な社会制度ないし社会資源の充実、開発を目的とした社会開発が、この住民福祉の主体性（自発性）、全体性、協同性という内面的意味に対決するとき、それは、従来の地域社会に対する外面的な、客体的接近という方法的原理から、内面的、主体的接近という新しい方法論に転換しなければならない。かくして地域開発の新しい方法論として、『共同社会開発（Community Development）』が登場することになる⁹⁾」と言う。久間さんのアプローチがこの内面的、主体的接近に沿った共同社会開発を志向しているものかどうか、訪問が短期間にすぎるので判断が難しい。

また、岡村の言うように、「当事者自身とその家族の生活条件の全体を把握するという社会福祉固有の視点に立ちながら、彼らの生活ニーズを総合的に充足する必要である。それは単一の福祉機関（ここでは「山岳民族福祉開発センター」がそれに当たろう）によって実施できるものではなくて、地域社会にある（タイでは地域社会外にも少なくなかろう）各種のサービス機関・団体施設の密接な協同と調整によってはじめて可能であり、また生活上不利な条件をもつ者に対する隣人や地域住民の相互扶助体制を必要とする¹⁰⁾」のであるが、久間さんの活動もこれに沿っていると言えるであろう。

まとめにある（1）どのように村の人と《開発》にとりくむか、（2）《村の人と共に》（村の人となりきって）という視点をもつこと、この2点についてもみてみよう。まず（2）についてであるが、田路貴浩によれば、文化人類学においても、「観察者がどこかの未開民族を観察しようとして

そのコミュニティに入り込もうとすると、観察者はコミュニティにとって異質な他者となって、コミュニティの日常的な生活を変質させてしまうというのである。これらがしめしているのは、観察者という立場の人間に対して、観察対象としての環境は独立した存在としてはありえないということである。客観的な対象の観察というものは神話にすぎない¹¹⁾という。久間さんは実践者として入り込んだのであるが、観察者ではない(そういう側面がないわけではない)にしても、共同生活者ではない故の限界というものはやはりあろう。山岳部族の人々からは、久間さんはやはり高度文明世界からの来訪者 - そしていずれはそこへ戻っていく人と捉えられているはずである。そこをどのように久間さん自身が自覚しているかである。(1)については、山岳部族の人々から、久間さんはそうした高度文明社会の価値観、技術論を外部から注入し、《環境開発》ないし《環境保全》する人と捉えられてはいないか。南北問題の解決はそのあり方がこうしたところで問われている。田路は、そうした技術論が「観察者をも巻き込む人間 - 環境系としての環境」という視点を見落としがちになるということである。技術論を論じる論者は環境の中に巻き込まれない」とし、「環境を技術による操作の対象としてとらえるばかりではなく、環境を経験し、その意味を知ること、つまり『解釈する』ことが重要なのである。外部から見られた人間 - 環境系ではなく、内部から見られた人間 - 環境系、主体からみた環境が捉えられなければならない。『客観的』な数値に置き換えられた環境ではなく、われわれの日常世界、『生活世界』にあらわれている主体的な意味が、できるだけ損なわれずにあるがままに掴まえられなければならない¹²⁾と言う。地域《開発》が必要だとして、それが山岳部族社会の主体的な意味ができるだけ損なわれない、内発的なそれであるように、いかに身を処するか、コミュニティワーカーとしての久間さんの真価が問われているのであろう。

注

1) 岡村重夫「地域開発と住民福祉」『都市問題研究』東京市政調査会、第16巻、第1号、1964年1月、13頁。なお、岡村は、「経済開発とは工業を中心とする各種産業の経済的面で開発をいい、社会開発とは都市、農村、住宅、交通、保健、医療、公衆衛生、社会福祉、教育などの社会的面で開発をいう。経済開発の直接の目的が生産及び所得の増大であるのに対し、社会開発は直接人間の能力と福祉の向上を図ろうとするものである」(同上7頁)との人口問題審議会の意見書を引きつつ、共同社会開発とは「地域開発の新しい方法論」(同上12頁)であり、「共同社会開発も、社会開発とおなじく、地域社会住民の社会的および経済的水準の向上、改善を目的とするものであるが、しかし具体的な活動目標の選定、資源の動因計画の立案、計画の実行にいたるすべての段階を通じて、地域住民の努力と参加によってなされるところに、前者の方法的な特色がある」(同上12頁)としている。

2) 神野直彦「書評：後藤和子著『文化と都市の公共政策』」『書齋の窓』No.552、有斐閣、51頁、2006年。

3) 同上、51頁。

4) 地図及び説明は <http://www.geocities.jp/ken3debangkok/northern/kamphaengphet/> より引用。

5) <http://www.npo-nac.jp/erigon.pdf> の久間さんの書き込みより引用。

6) 岡村重夫『地域福祉論』第8版、光生館、40頁、1981年。

7) 同上、34頁。

8) 同上、24頁。

9) 1) に同じ。12頁。

10) 6) に同じ, 42頁。

11) 田路貴浩他編著『環境の解釈学』学芸出版社, 7 ~ 8 頁, 2003年。

12) 同上, 8 ~ 9 頁。

(2006年5月10日受付, 2006年5月11日受理)